万葉論
3章　第三巻

九州天皇家と近畿天皇家

二つの泊瀬

或る本、藤原京より寧楽宮に遷る時の歌　79

天皇の 御命畏み 柔びにし 家を置き 隠國の 泊瀬の川に 舟浮けて わが行く河の 川隈の 八十隈おちず 萬度 かへり見しつつ 玉桙の 道行き暮らし あをによし 奈良の京の 佐保川に い行き至りて わが寝たる 衣の上ゆ 朝月夜 さやかに見れば 栲の穂に 夜の霜降り 磐床と 川の水凝り 寒き夜を いこふことなく 通ひつつ 作れる家に 千代までに 来ませ大君よ われも通はむ

天皇乃 御命畏美 柔備尓之 家乎擇 隠國乃 泊瀬乃川尓 船浮而 吾行河乃 川隈之 八十阿不落 万段 顧為乍 玉桙乃 道行晩 青丹吉 楢乃京師乃 佐保川尓 伊去至而 我宿有 衣乃上従 朝月夜 清尓見者 栲乃穂尓 夜之霜落 磐床等 川之水凝 冷夜乎 息言無久 通乍 作家尓 千代二手 来座多公与 吾毛通武

「隠國（こもりく）の泊瀬の川」と歌われた泊瀬とはどこか。日本古典文学大系万葉集の頭注45は奈良県磯城郡初瀬町のあたりとしている。「隠國の泊瀬」を特定できる歌詞がある。

(1)　京とは楢乃京師である。楢（なら）は奈良である。
(2)　川とは佐保川である。

奈良の京とは平城京である。そして佐保川は平城京の東南を流れ秋篠川と合流し大和川となる。歌われた舞台は奈良である。従って「隠國の泊瀬」と歌われた場所も奈良である。作歌者は寧楽宮の建築に携わった者であろう。栲の穂に 夜の霜降り（真っ白に霜が降り）、川の水凝り（川の水が凍る） 寒き夜（冷たい夜）も通って造った宮にいつまでもおいでください。天皇とは元明天皇である。直前に元明天皇の歌が編纂されている。

和銅三年庚戌の春二月、藤原宮より寧楽宮に遷りましし時に、御輿を長屋の原に停めて遙かに古郷を望みて作る歌　78
飛鳥の明日香の里を置きて去なば君があたりは見えずかもあらむ

元明天皇は和銅三年（710）持統の「藤原宮」から「寧楽宮」に遷った。持統の宮「藤原宮」は藤原京にあり、元明の宮「寧楽宮」は平城京にあった。藤原京は持統が造った京ではない。日本書紀に持統が造ろうとした京の記事がある。その京の名は新益京と書かれている。

持統四年九月二七日に、使者を遣して新益京を鎮め祭らしむ。　（持統紀四年）

持統天皇が四年（690年）即位後すぐ着手した新益京とは藤原京ではない。平城京である。平城京の造営は持統四年に始まり元明の世に完成した。平城京完成まで約20年の月日を要した。そして元明は710年、持統と共に住んだ藤原京藤原宮を去って奈良平城京の寧楽宮に遷った。その宮を造った人の歌が79番歌である。79番歌で「隠國（こもりく）」と歌われた場所は奈良初瀬町である。

初瀬山
奈良県磯城郡
初瀬町
(C)Geo science, NTT DATA, RESTEC / Included (C)JAXA
1km

林大衆食堂
花水館
NTT西日本
初瀬別館
金毘羅神社
山本商店
初瀬
益美食堂
森岡商店
初瀬街道
スターチェーン
平田商店
165
初瀬
妙光寺
初瀬川
市立初瀬小学校
第三保育所
天龍津地
妃子神社
初瀬薬局
桜井東人権
ふれあいセンター
252
(C)Yahoo Japan,(C)ZENRIN
50m

79番歌で詠われた情景は奈良の初瀬の川、奈良の佐保の川である。

天皇の命令を承り、くつろいでいた家を出て、隠國の泊瀬の川に舟を浮べ、河の曲がりが数多く、その曲がるごとに幾度も振り返り 道中を行き暮らして あをによし 奈良の京の 佐保川に至った。 私が寝る衣の上の朝の月をさやかに見れば真っ白い夜の霜が降り川の水も凍っている。そんな寒い夜を休むこともなく通って作った宮に千代までもおいでください大君よ。私も通いましょう。

奈良初瀬には川が流れる。初瀬川は佐保川と合流する。作歌者は初瀬川を舟で下り、やがて奈良の佐保川まで出た。そこで野営をしながら寧楽宮の建造に従事したのであろう。
「隠國(こもりく)の泊瀬の川」は奈良初瀬の川である。「隠國」とは籠もった(奥まった)國の意であろう。奈良初瀬は桜井市から入った奥まった所にある。奈良初瀬は「隠國」と呼ばれるにふさわしい処である。佐保を詠った長屋王の歌がある。

長屋王、馬を寧楽山に駐てて作る歌二首
300　佐保過ぎて寧楽の手向に置く幣(ぬさ)は妹を目離れず相見しめとそ
佐保を過ぎて寧楽山の峠で神に幣(ぬさ)を手向けるのはいつも妻に会わせてくださいと願うからです。

301　磐が根のこごしき山を越えかねて哭には泣くとも色に出てめやも
磐の根のようにごつごつした山を越えかねて声をあげて泣くことはあっても妻のことを顔色に出したりはしない。

佐保は現在の奈良市に地名が伝わる。また長屋王の豪邸は平城京にあった。奈良初瀬が「隠國の泊瀬」である。元明天皇の時代に平城京の近くの初瀬町が「隠國の泊瀬」と呼ばれていたのはまちがいない。

もう一つの泊瀬

「泊瀬」を歌った歌は多い。人麿も草壁皇子の子どもである軽皇子と安騎の野に旅をしたときに歌っている。安騎の野は草壁皇子が嘗て狩りをした猟場だった。

軽皇子の安騎の野に宿りましし時、柿本朝臣人麿の作る歌
45　やすみしし わご大王　高照らす 日の皇子 神ながら 神さびせすと 太敷かす 京を置きて 隠口の泊瀬の山は 真木立つ 荒山道を 岩が根 禁樹おしなべ　坂鳥の 朝越えまして 玉限る 夕去り来れば み雪降る 安騎の大野に 旗薄 小竹をおしなべ　草枕 旅宿りせす 古思ひて

持統天皇三年(689年)4月13日に亡くなった草壁皇子はかって安騎の野で朝狩りを行った。人麿と軽皇子は京を出発し、荒々しい泊瀬の山道を朝越えて安騎の野にやって来た。夕方には雪が降ってきた。旅の宿をとった二人は亡くなった草壁皇子を思いながら夜を明かした。

短歌
46　安騎の野に　宿る旅人　うち靡き　寐も寝らめやも　古思ふに
安騎の野に宿をとっている旅人(軽の皇子と私)は寝ているが眠れはしない。あなた(草壁皇子)がご存命であった昔のことを数々思い出されて。

47　ま草刈る　荒野にはあれど　黄葉の　過ぎにし君が　形見とぞ来し
茅を刈る荒野ではあるが黄葉が散っていくように亡くなってしまわれたあなた(草壁皇子)の思い出の地であるここにあなたのお子様と共に私はやって来ましたよ。

48　東の野に　炎の　立つ見えて　かへり見すれば　月かたぶきぬ
原文は「東　野炎　立所見而」である。「野炎」は文字通り「野の陽炎」のことであろう。つまり人麿と軽

皇子が旅宿った安騎の野に朝たちのぼる陽炎（かげろう）のことである。陽炎とは水蒸気である。朝の燭光をさすのではない。従って歌は原文にそって次の如く訓むべきであろう。

48　ひんがしに　/　野のかげろひの　/　たつみえて / かへり見すれば　/　月かたぶきぬ

人麿と軽皇子は雪が降る安騎の野に泊まった。一晩草壁皇子の思い出がよみがえり眠ることができなかった。朝になり東の山に太陽が昇ってきた。太陽の日差しを浴びて安騎の野は暖まりに東には陽炎が立ちのぼっている。西の空には月が沈もうとしている。

49　日並皇子の命の　馬並めて　み狩り立たしし　時は来向ふ
あなたの父日並皇子が馬を並べて朝狩りに向かわれたその時がやってきますよ。

人麿が歌った追憶は「隠口」の泊瀬の山と安騎の大野である。むろん「隠口」と「隠國」とは意味が異なる。「隠國」は奥まった國という意味であるが「隠口」とはどのような意味であろうか。「隠口」という漢字が使用されているからにはその地形が口に似ているからであろう。この歌の主題は川ではない。山と野である。人麿にはもう一つの泊瀬の歌があるがその歌も主題は山である。何故山が主題となっているのか。泊瀬の山が特別な山だったからである。

土形娘子を泊瀬山に火葬る時、柿本朝臣人麿の作る歌一首
428　隠口の泊瀬の山の山の際にいさよふ雲は妹にかもあらむ

人麿の428番歌は火葬の歌である。泊瀬の山では火葬が行われていた。泊瀬は死者を荼毘に付す土地だったのである。土形娘子を泊瀬山で火葬にした。その煙が泊瀬の山に昇っていく。煙は雲となる。山の上に漂っている雲は土形娘子の霊であろうか。雲は故人の霊と考えられていたようである。
人麿が亡くなった石川の上に立ちのぼる雲を見て人麿を偲ぼうと詠った挽歌が人麿の妻にもある。

225 直の逢ひは　逢ひかつましじ　石川に　雲立ち渡れ　見つつ偲はむ　（妻・依羅娘子）

泊瀬では火葬が行われていた。泊瀬は火葬の場所だった。死者を焼く煙が立ちのぼる泊瀬の山には死者の霊がいる。そのように人々は噂していたのである。

石田王の卒りし時、丹生王の作る歌一首　420
なゆ竹の　とをよる皇子　さ丹つらふ　わが大王は　隠國の　泊瀬の山に　神さびに　斎きいますと　玉梓の　人そ言ひつる　逆言か　わが聞きつる　狂言か　わが聞きつるも　天地に　悔しき事の　世間の　悔しきことは天雲の　遠隔の極み　天地の　至れるまでに　杖策きも　衝かずも行きて　夕占問ひ　石占もちて　わが屋戸に　御諸を立てて枕辺に　斎瓮をすゑ　竹玉を　間なく貫き垂れ　木綿襷　かひなに懸けて　天なる佐々羅の小野の　七節菅　手に取り持ちて　ひさかたの　天の川原に　出で立ちて　禊身てましを　高山の巌の上に　座せつるかも

柔らかい竹のようにたおやかな皇子、紅顔のわが大王は隠口（こもりく）の泊瀬の山に神としていらっしゃると使いの人が云う。私が聞いたのは逆言（ざれごと）か、狂言（たわごと）か。
天地（この世界）で悔しいことは、世の中（この社会）で悔しいことは天雲の遠く離れた、天地の果てまでも或いは杖を策（つ）き、或いは杖つかずに行き、夕占いをし、石占いをし、家には御諸（神座）を立てて、枕辺には斎瓮（神酒を入れた瓮）を置き、竹玉を垂らし、木綿の襷を腕にかけ、天（あま）に有る佐々羅の小野の七節菅を手にもって、ひさかたの天の川原に出で立ち禊身（みそぎ）をすればよかったのに。そうしなかったので石田王は高山の巌の上にいらっしゃることになってしまった。

亡くなった石田王は泊瀬で火葬にされたのであろう。故に泊瀬の山に神となって住んでおられると使いの人がいう。ざれごとであろう。それはたわごとであろう。若くして石田王が亡くなったのは私が夕占をしてまた石占を

して家では神座を祀り枕辺には御神酒を入れた甕を置き木綿の襷をかけて天(あま)の佐々羅の小野にある七節菅を持って天の川原で禊ぎをしなかったからこのようなことになってしまったのだ。悔しいことだ。石田王は高山の巌の上に眠っておいでになる。この高山とは泊瀬の山のことであろう。ここでも泊瀬の山に死者がいると詠われている。

421 逆言の狂言とかも高山の巌の上に君が臥やせる

同じ趣意の歌である。石田王は高山の巌の上にいらっしゃるという。これは逆言が狂言か。まだお若いのにお亡くなりになるなんて事はありえないではないか。

422 石上布留の山なる杉群の思ひ過ぐべき君にあらなくに

石上布留の山にある杉群のように私の心の記憶が過ぎ去っていくことはないあなたである。

京、太宰府

平安京における鳥辺山ともいえる泊瀬の山とはどこに存在したのか。人麿が「太敷かす京を置きて」と詠った京とは太宰府である。

それまでの九州天皇家の都(宮処)は近江大津宮(小倉南区長野)、橘の島宮(彦島老町)、高市岡本宮(田川市)、難波高津宮(小倉北区)、飛鳥浄御原宮(田川市)にあった。太宰府はもともと九州天皇家の京ではなかった。太宰府は天武が壬申の乱で戦った日本國の京であった。日本國天皇並びに日本國太政大臣大友王とその閣僚はこの京にいた。622年白村江に於ける戦勝国唐の大使が筑紫に駐屯していたからである。日本國天皇天智は病床にあった。彦島に居た九州天皇家大海人皇子を呼び出し会見を行った国王は安心して滋賀近江の都に帰京した。そしてまもなく亡くなった。九州天皇家の皇子大海人はその報せを聞いて蜂起したのである。九州天皇家大海人皇子は壬申の乱に勝利して田川市の「飛鳥浄御原宮」で即位して太宰府に入った。天武にとっても人麿にとっても「京」とは太宰府をさす。天武王朝の人々はすべて太宰府に移った。九州天皇家の石見國(苅田町)に居た人麿の生活も一変した。人麿はその変化を詠っている。その第一は石見國で通った最初の妻との別れである。

柿本朝臣人麿、石見國より妻に別れて上り来る時の歌　二首

131　石見の海　角の浦廻を　浦なしと　人こそ見らめ　潟なしと　人こそ見らめ　よしゑやし　浦はなくとも　よしゑやし　潟はなくとも　鯨魚取り　海辺を指して　柔田津の　荒礒の上に　か青なる　玉藻沖つ藻　朝羽振る　風こそ寄せめ　夕羽振る　波こそ来寄れ　波のむた　か寄りかく寄り　玉藻なす　寄り寝し妹を　露霜の　置きてし来れば　この道の　八十隈毎に　萬たび　かへり見すれど　いや遠に　里は放りぬ　いや高に　山も越え来ぬ　夏草の　思ひ萎へて　偲ふらむ　妹が門見む　靡けこの山

反歌二首

132　石見のや　高角山の　木の際より　我が振る袖を　妹見つらむか

133　小竹の葉は　み山もさやに　乱るとも　我れは妹思ふ　別れ来ぬれば

この歌は題詞にある如く人麿が石見國(苅田町)に妻を残して「上り来る」時の歌である。「上り来る」とは京へ上るという意味である。「京」とは太宰府である。太宰府に上るのは一時的な上京ではない。故郷石見國に戻ることはないであろうと覚悟を決めた別れ歌である。人麿にはもう一首妻との死別を悲しんだ歌がある。

柿本朝臣人麿、妻死りし後、泣血哀慟して作る歌二首

207　天飛ぶや 軽の路は 吾妹子が 里にしあれば ねもころに 見まく欲しけど 止まず行かば 人目を多み 数多く行かば 人知りぬべみ 狭根葛 後も逢はむと 大船の 思ひ頼みて 玉かぎる 岩垣淵の 隠りのみ 戀ひつつあるに 渡る日の 暮れぬるがごと 照る月の 雲隠るごと 沖つ藻の 靡きし妹は 黄葉の過ぎて去にきと 玉梓の 使の言へば 梓弓 音に聞きて 言はむ術 為むすべ知らに 音のみを 聞きてあり得ねば 我が戀ふる 千重の一重も 慰もる 情もありやと 吾妹子が やまず出で見し 軽の市に 我が立ち聞けば 玉たすき 畝傍の山に 鳴く鳥の 声も聞こえず 玉桙の 道行く人も ひとりだに 似てし

行かねば すべをなみ 妹が名呼びて 袖ぞ振りつる

この亡くなった妻は石見國に残してきた妻ではない。京、太宰府で通った妻である。彼女は太宰府の「軽」に住んでいた。今、太宰府に「軽」という地名は残っていないが、「軽」は市で有名だった。「軽の市」は天武紀に登場する。「軽の市」は太宰府の台所を支えた市場であった。「軽の市」とは筑紫野市二日市と思われる。天武は太宰府に入りこの京で日本全国を治めた。天武が太宰府大極殿で亡くなった後、持統がこの京で天下を治めた。

万葉集においてただ「京」と呼ばれるのは平城京か太宰府のどちらかである。

鞍作村主益人、豊前國より京に上る時作る歌一首
311　梓弓引き豊國の鏡山見ず久しくならば戀しけむかも

豊國の鏡山とは香春町の鏡山古墳のことである。古くは神功皇后が戦勝を祈願して鏡を納めたと伝わる丘である。鏡山の端には持統三年、太宰師になった河内王が埋葬されている。問題は京である。この京は太宰府である。香春町から太宰府へ上っていった時に詠われた歌である。香春町は古くは豊前國と呼ばれていたのである。豊前國にある鏡山を長く見ずにいたならきっと恋しくなることである。鞍作村主益人は香春町の住人だったのであろう。

出雲守門部王、京を思ふ歌一首
371　飫宇の海の河原の千鳥汝が鳴けばわが佐保河の思ほゆらくに

飫宇の海（島根県意宇郡）の河原で鳴く千鳥よ。お前が鳴けば私は佐保河を思い出されることである。京とは平城京である。

泊瀬の山は朝倉市秋月の山

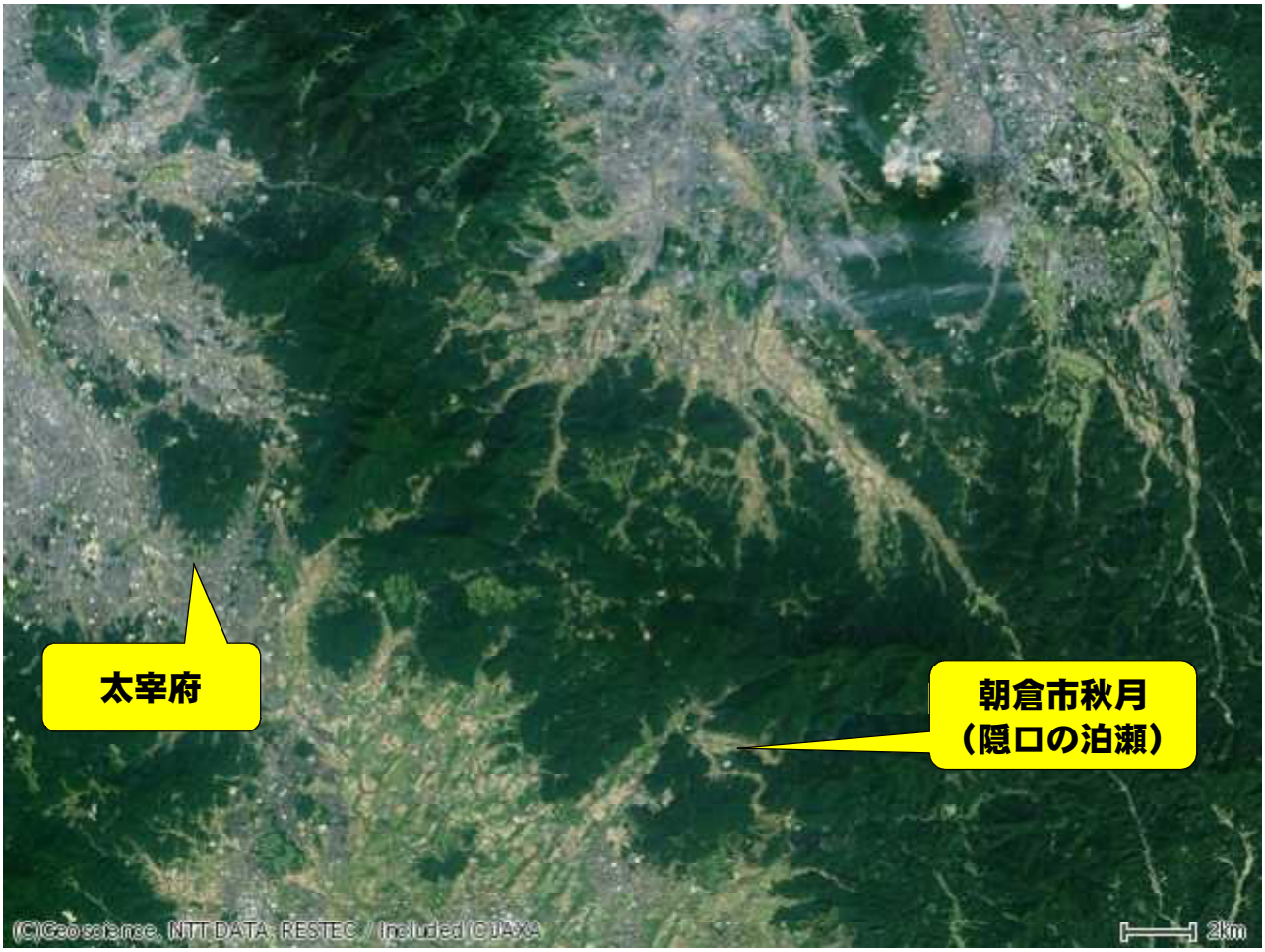
人麿は軽皇子と共に京、太宰府を出発し、泊瀬の山を越えて安騎の大野に到り、旅の宿をとった。

軽皇子の安騎の野に宿りましし時、柿本朝臣人麿の作る歌

45　やすみしし わご大王　高照らす 日の皇子 神ながら 神さびせすと 太敷かす 京を置きて 隠口の泊瀬の山は 真木立つ 荒山道を 岩が根 禁樹おしなべ　坂鳥の 朝越えまして 玉限る 夕去り来れば み雪降る 安騎の大野に 旗薄 小竹をおしなべ　草枕 旅宿りせす 古思ひて

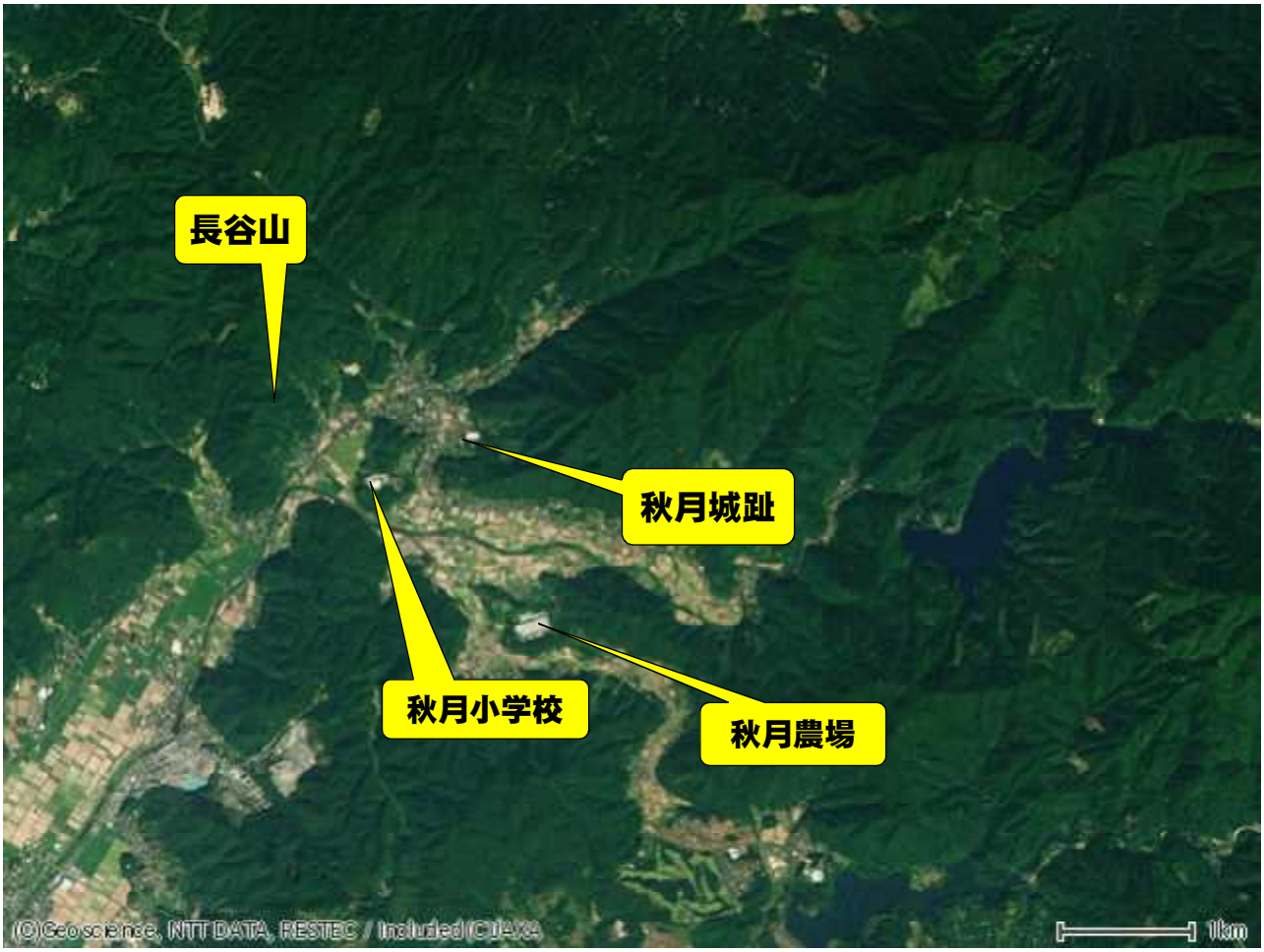
八方を治めるわが大王、高く照りたまう日の皇子は立派に統治されている京（太宰府）を離れて、檜が立ちならぶ隠口の泊瀬の山の荒山道を岩や邪魔になる木々をおしなべて朝越えされて夕方になれば雪が降る安騎の大野に旗薄や小竹をおしなべて草枕旅宿りをなされている。古を思いながら。

では太宰府の近くに「隠口」と呼ばれるにふさわしい土地があるだろうか。そこは「安騎」と呼ばれていた。「泊瀬」、或いは「長谷」と呼ばれていた。そこには川が存在した。京、太宰府の火葬場があった。とうぜんお寺も存在した。このような土地はどこか。



人麿が詠った泊瀬とは朝倉市秋月である。秋月は甘木から田川に抜ける幹線道路322号線上に位置する。秋月はこの路線上で重要な町だったのであろう。322号線から西に入った「上秋月」には比較的広い野が拡がる。上秋月は口の形をした地形である。秋月小学校がある丘はちょうど上唇に当たる。秋月農場がある丘は舌に当たる。だがこの上秋月の平野は322号線からは隠れて見えない。上下の唇は閉じられているからである。従って「隠口」と呼ばれたのである。ここには「河風」と詠われた川が平野の中央を流れている。秋月城趾の近くには古心寺、大涼寺、長生寺などのお寺も存在する。この場所がかっての火葬場だったのであろう。死者を焼

く煙が立ちのぼっていった山は秋月城趾の背後の山であろう。



同じ石田王の卒りし時、山前王の哀傷びて作る歌一首

423　つのさそふ　磐余の道を　朝さらず　行きけむ人の　思ひつつ　通ひけまくは　ほととぎす　鳴く五月には　菖蒲草　花橘を　玉に貫き　かづらにせむと　九月の　時雨の時は　黄葉を　折りかざさむと　延ふ葛の　いや遠永く　萬世に　絶えじと思ひて　通ひけむ　君をば明日ゆ　外にかも見む

或る本の反歌二首

424　隠口の泊瀬少女が手に巻ける玉は乱れてありといはずやも

（石田王が愛した）隠口の泊瀬の少女が手にまいている玉は緒がきれてバラバラになってしまったというではないか。

425　河風の寒き長谷を歎きつつ君があるくに似る人も逢へや

川風の寒い泊瀬を歎きあるいているあなた（石田王）の姿に似た人に逢いはしない。あなたはもう亡くなってしまわれたのだから。

二つの泊瀬の意味

人麿が詠い丹生王、山前王が詠った泊瀬とは朝倉市秋月である。この時の京は太宰府である。天武と持統がいた京が太宰府である。人麿も石田王も丹生王も山前王もこの太宰府にいた。そして亡くなった人々は泊瀬（秋月）で荼毘に付され泊瀬の山の頂に霊となって祀られていると思われていたのである。「隠口の泊瀬」と呼ばれていたのは口の地形をした秋月である。今も長谷山という地名が残る。

天武天皇は太宰府に居た。持統三年（689年）4月に草壁皇子が亡くなった。人麿は草壁皇子の子ども、軽皇子を連れて泊瀬（朝倉市秋月）の安騎の野に出かけた。そこが草壁皇子が愛した猟場だったからである。

元明天皇の京は奈良平城京である。元明の宮は寧楽宮である。元明天皇の時代に泊瀬と呼ばれていたのは奈良初瀬町であった。

天武は686年9月11日太宰府で亡くなった。天武が亡くなったときの大后（持統）の歌がある。歌われた「神岳」とは太宰府の鬼門を護る宝満山である。ここには開府以来、神が祀られてきた。

天皇崩りましし時の大后の御作歌一首

159　やすみしし わご大君の 夕されば 見し給ふらし 明けくれば 問ひ給ふらし 神岳の 山の黄葉を 今日もかも 問ひ給はまし 明日もかも 見し賜はまし その山を 振り放け見つつ 夕されば あやに悲しみ 明けくれば　うらさび暮らし 荒栲の 衣の袖は 乾る時もなし

元明は「朕崩ずるの後、大和国添上郡蔵宝山雍良岑に竈を造り火葬し、他処に改むるなかれ」と遺詔して721年12月7日に奈良で亡くなった。天武は太宰府、元明は平城京である。天武と元明、二人の天皇の間にいた天皇は天武の皇后で、元明の義母である持統天皇である。

九州から奈良に遷都したのは持統である。持統は689年草壁皇子を失ってまもなく太宰府を去り奈良に遷都した。太宰府には「隠口の泊瀬」があった。奈良に遷った持統は奈良初瀬を「隠國の泊瀬」と呼んだ。こうして二つの泊瀬が存在することとなった。やがて太宰府の泊瀬は名前を変え、「安騎」という地名だけが「秋」として残された。平城京は持統が全国支配のために奈良に造営した京である。近畿天皇家はここに始まった。この栄光の地の泊瀬はそのまま残され現在まで初瀬（長谷）として伝わってきた。

こうして万葉集には二つの泊瀬の歌が存在する。二つの泊瀬の歌には二つの京が詠われている。二つの京の存在は九州から奈良へ権力が移動した歴史を物語っている。